

駒井四郎

元大学総務部長

に聞く

大学の本質を

見据えて

聞き手

河野仁昭

近江商人の

——どうもご無沙汰しました。お元気そうで。

駒井 いや、ほかはともかく、脚が弱ってきて。だから大阪の女子大のほうも辞めさせてもらいました、通勤が危いから。階段など特にね。

——梅田あたり混みますものねえ。それはそうと、駒井先生は草津のお生まれですか。

駒井 そうです、この家で（明治四十四年一月七日生まれ）。家は最近建て替えたから、むかしのままではありませんが。

——私は同志社へ勤められるようになってから、草津に住まれたんだらうと思っていました。

駒井 そうじゃないんです、もともと……。「駒井呉服店」となっていますが……。

駒井 代々呉服屋をやっていました。いまも家内がやるというもんやからね。やっているというても、やっているのやらないのやらわからん程度で。（笑）

——いや、とんでもない。お家を建て直さ

れたそうですね、お店の構えなんか、なんとなく昔からの様子を残しておられるし。でも、先生は呉服店のご主人には見えませんか（笑）。驚きました。では、中学校などもこちらのの方の？

駒井 こちらなんです、中学校じゃなくて商業学校、八幡商業です。

——むかしは、商家の子弟はどことも商業学校ですね、京都でも。八幡商業は入学がむずかしかったんでしよう、京都なら第一商業とか。

駒井 当時は難しかった。大学への進学を希望する者が入る膳所中学校と、商人の子供が行く八幡商業、滋賀県ではこの二つの学校が入りにくかった。

——先生は長男ですか。

駒井 そうじゃないんだけど、商人の子だからということ。卒業してからも勉強したいなら彦根高商か神戸高商へ進んだらいいからと。

——どちらも名門ですわね。でも、同志社へ進学なさったんでしよう。

駒井 ぼくが小さいときから、矢部さんという先生が日曜日に膳所から来ていました



駒井四郎元大学総務部長

ね、その日曜学校へ行っていたし、近江八幡には近江ミツシヨンの吉田悦蔵さんがいて。

——戦前に同志社の理事もなさっていた、あの吉田さんですね。

駒井 そうそう、メンソレータムなどをつくって近江ミツシヨンの財政的基礎をつくるとか、いろいろ活躍された方です。その吉田さんや矢部さんから影響を受けましてね。

——それで同志社の神学科へ……。

駒井 そうです。どうも商売人になるのは気が進まなかったもんやから。(笑)

——草津は東海道と中仙道の分岐点で、お宅のすぐ近くに、その立派な道標が立っているのを見ってきましたけれども。交通の要衝だから、古い町にしては新しい文物が入ってく

る。キリスト教に対しても、抵抗する人もいるだろうけど、積極的に受容しようとする駒井先生のような方も出てくるのではないですか。

駒井 そういう面があるかも知れませんが、神学部へ入られるのですから、それまでに洗礼を受けておられたんでしょう。

駒井 受けていました、草津教会で。

——お近くですか。

駒井 そうです。

——洗礼とか同志社の神学部とか、お家の方は反対しませんでしたか。

駒井 かなり反対されました、「そんなことやったら、お前、食えへんぞ」とね(笑)。「呉服屋のせがれがなにをするんか」というわけで。しかし、「僕は反対されても同志社へ行くんや」と頑張りましてね。

——先生なら頑張りそうな気がします。(笑)

神学生時代の思い出

——先生が入学されたのは同志社専門学校の神学部ですわね、昭和何年ごろ？

駒井 たしか四年でした(昭和四年四月入学)。八年に卒業して大学の文学部神学科へ進んだのです。

——ご卒業が昭和十一年三月だから、七年か八年在学されたわけですね。岡山の更井良夫さんなんか同じころでしょう。

駒井 更井さんは大学の一級上でした。それから嶋田(啓一郎)さんが、やはり一級上で。

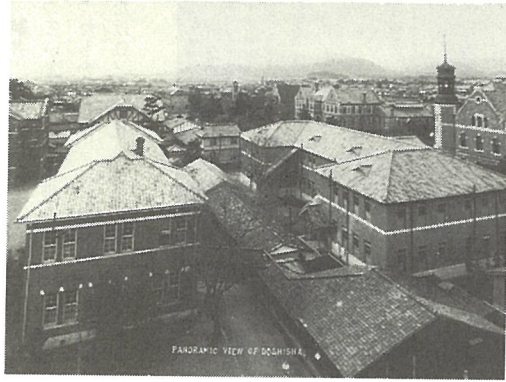
——岩井文男先生なども同じころですね。ここから通われたんですか。

駒井 通っていたんですが、母が子宮癌にかかって府立医大の病院へ入院したもので、個室だったので、看病を兼ねてそこへ寝泊りして、かなり長い期間そこから通ったのです。

——それは偉いですねえ、まだ学生でお若いのに……。そうですか、お母さんは癌で……。

駒井 あの時は健康保険というようなものはないからね、かなり費用がかかったようです。

——昭和八年四月に大学の神学科へ入学されたようですが、お友達という……。



昭和初期の今出川キャンパス

て三専攻になりますわね。

駒井 そうでした。

——社会事業学専攻は竹中勝男先生などが中心だったようですが、駒井先生はその専攻へ入られたんですね。

駒井 いやいや、私は神学専攻。

——ええッ？ じゃア、牧師さんになるつもりで……。

駒井 いや、牧師になるつもりは最初からなかった(笑)。キリスト教的な社会福祉事業をやりたいと考えていましたんでね。

——すると、主として指導を受けられたのは、竹中勝男先生からではなくて……。

駒井 大塚節治先生です、学部長もされていたし。

——富森京次、蘆田慶治、E・S・カープ、S・C・バレット先生たちですね。

駒井 そうでした。それで卒業のとき、僕は同胞教会に属していましたから、その牧師にならんかといわれました。近江ミッションからも来てくれんかというてくれていましたね。僕は牧師になる気はなかったけれども、近江ミッションの吉田悦蔵さんとか、ヴォーリスさんはよく知っていたし、あそこはご承

知のようにいろいろ事業もやっている、メンソレータムとか病院とか学校とかですね。ヴォーリスさんは大きい夢をもっていて、近江八幡でそれを実現しようとしていました。

——でも、近江ミッションへは結局いかれなくて……。

駒井 そのころ、賀川豊彦さんが東京の本所で消費組合とか社会運動をさかんにやっていたんですな、医療組合とか、学校とか。もちろんキリスト教伝道もやっていました。社会運動は、いわば伝道の実践ですよ。

——賀川さんに共鳴されたわけですね。

駒井 近江ミッションからも言うてくれているもんやから、迷いましたけれどもね。

——同志社にも学生消費組合があったでしょう、岡本清一先生とか岩井文男先生たちが学生だったところに。

駒井 ありました。私もたまに利用はしましたけれども、運営には関与しなかった。

消費組合運動と軍隊生活

——戦後の生活協同組合というのは私たちに馴染みぶかいですが、戦前の消費組合とい

駒井 いろいろいしましたが、嶋田啓一郎さんなんか仲がよかったですね。彼は協同組合関係のことを研究しておられたので、その感化を私うけました。京大の近くに嶋田さんは借家を借りていたので、一緒に住んだこともありましたしね。

——協同組合というと、昭和六年四月に文学部神学科には社会事業学専攻が新設されて、それまでの神学専攻、倫理学専攻に加え



大塚節治先生

うのはどういうものだったか、よくわからな
いのです。卒業して一年間同志社で研究され
て、昭和十二年に先生は江東消費組合へ入ら
れたようですが、どこにあったんですか。
駒井 東京の本所です。下町で、低所得層
の住民が多かった。

——その消費組合というのは、どういうこ
とをするんですか、社会福祉運動の一環だろ
うという想像はつきますけれども。

駒井 江東地区に四カ所ほどセンターをも
つていまして、主に扱うのは米とか醤油とい
ったものでした、他の食品も扱ってはいまし
たけれども。私は給食事業をやりましてね。

——学校とかの？

駒井 そうではなくて、あの辺りには従業
員が十五名から五十名ぐらいの中小企業があ
るわけですよ、大きな企業の下請けですなア。

——いわゆる町工場ですね。

駒井 そうそう。そういう町工場の従業員
の食事がよくないものだから、栄養的な欠陥
が出てきていた。そこで一つ給食事業をやる
うじゃないかということが始めたわけです。
これが当りましてね、最盛期には二万食ぐら
い家庭へ納めるほどでした。

——家庭で作るかわりに、まとめて消費組
合で作って、それを配達してあげるわけです
か。大量生産だから、各戸ごとにつくるより
安上がりですわねえ。もちろん栄養のバラ
ンスも考慮されているだろうし……。

駒井 消費者にとつたら安くつくわけで
す、一切五円の鮭でも、組合でまとめて仕入
れたら安いでしょう。調理もほとんど機械で
やったし。そういう仕事が知られてくると、
小さな工場なんかは、自分とこで作るのは大
変やから、あんたとこでやってもらえんかと
いうことになって、集団の給食もやるという
具合で。ライオンなどは全部江東消費組合が

請負っていたですよ。

——それは確かにいいアイデアですね。

駒井 それから材料の仕入れを安くしよう
というので、千葉県のほうで土地を入手して
野菜つくりをやろうと、やりかけていたら戦
争が激しくなって、駄目になった。

——戦争中は消費物資が統制になったか
ら。

駒井 配給制でしょう。そういうことにな
つたら消費組合はあきませんわな。

——自由主義経済でないかと？

駒井 そうです。

——先生、兵役は？

駒井 いきました、通算して五年ぐらい行
っていました。大学を卒業してしばらくした
ら召集がきましてね、補充兵で、伏見で訓練
を受けたんです。私は大学にいる間、軍事訓
練をサボったんですよ、キリスト教は平和主
義だから、教練なんかいらんとね。けれども
兵隊にとられたら、それは具合が悪いですわ
な(笑)。「僕はクリスチャンやから」いうた
って、だれも聞いてくれへんからね。(笑)
——全然訓練を受けたことがなかったんで
すか。

駒井 八幡商業ではやりました。しかし同志社では全然出なかつた。だから、軍隊へ入つてから苦労するのは罰ですわ。(笑)

——伏見で訓練を受けてどちらへ？

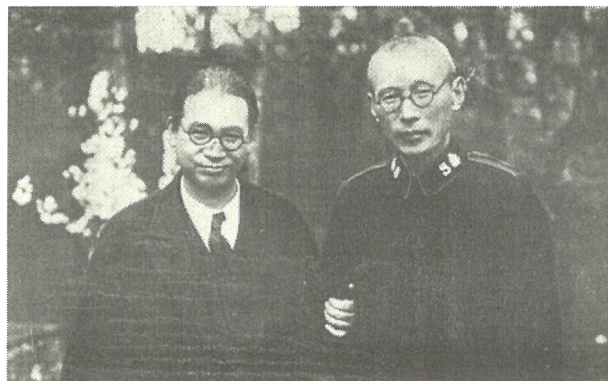
駒井 満州、むかしの満州です。ノモンハン戦のあとのほうで。黒竜江というのがありますが、その陣地へ配属されまして、おもに観測をやらされました。陣地は丘の上にあつて、その周辺は草原でしたから、戦争がないときはよかつたですな、すぐ向うにソ連兵が見えるのです。馬を連れてきて河で水を飲ましたりしているのが。

——見ている分にはいいけど、戦争になると……。

駒井 そりやもう、あきまへんわ(笑)。僕らが行つたときは(昭和十九年)、戦局はもう不利であることがかなりはつきりしてしましたからね、ソビエトと戦うつもりはなかつたから、打つ手が遅れていたわけです。ソ連の軍隊は優秀な機械化部隊で、日本の軍隊より進んでいましたわ。それがどうツとやつてきて包囲されたんだから。

——じゃア、随分犠牲者が出たでしょう。

駒井 僕らの中隊で残つたのは三十名ぐら



賀川豊彦先生と山室軍平先生

い、他はみなやられました。

——よくご無事で……。

駒井 病氣してハイラルの師団司令部だつたと思うけど、その病院へ入院したりしましたけどね。

同志社大学学生部へ

——復員されてすぐ同志社へつとめられたんですか。

駒井 いや、兵隊にとられるまで働いていた東京の、江東消費組合の仕事が続けていました。けれども、東京は空襲で焼けてしまつているところへ、なにもかも配給制でしょうが、切符を持つて行かんことには飯も食べさせてもらえない。

——そうでしたねえ、憶えがあります。

駒井 そやから、協同組合は伸び悩みでしてね。アメリカ軍でなくて、イギリス軍に占領されていたら少しは違つていたかも知れません。

——違うんですか。

駒井 違いますね、アメリカは自由を重んじる国だから。英国には協同組合的な思想がいくらかありましたけれども。

——なるほどね。

駒井 東京でなんとか再建しなくてはと思つていろいろやつていたら、兄が死にましてね、それで家へ帰つてこいというので。

——お店のこともありますわね。

駒井 あるんですが、それはまあごく小規模のものだし、嶋田啓一郎さんなどの紹介で同志社へ入れてもらったのです(昭和二十七年五月)。宗教主任になるようにと同志社から言ってきたんですよ。

——それはわかりますね、神学専攻のご出身だから。

駒井 僕はしかし宗教主任よりも学生部の仕事のほうがおもしろそうだから(笑)。おもしろいという具合が悪いけれども、希望して学生部の仕事をやらしてもらうことになったわけです。そのときの学生部長は岡本清一先生でした。

——すると田畑忍先生が学長で……。

駒井 そうでした。岡本先生はなかなかの詩人でしたね、キリスト教平和主義で、ロマンチストでした。だから学生たちともよく喧嘩したり怒鳴られたりしていました。いい人ですね。

——学生部はそのころ致遠館の一階だったでしょう。

駒井 いま出納課がいる、あの部屋です。それから大江直吉さんがいました。

——大江先生が学生課長だったですか、駒井先生は厚生課長をしばらくされて。

駒井 最初は厚生課長でした。

——厚生課のお仕事の中心は、学生の生活援護でしょうから、それまでの消費組合の仕事や理論が適用できるというか、相通じるところがあるんじゃないかという気がしますが。

駒井 共通するところがあるんです、だから学生の代表と話しあって、同志社にも協同組合をつくろうやないかと……。

——ああ、同志社の生協は先生が。

駒井 そうです。学生の消費生活の援助をしなくてはいかんといいことですね。

——生協が出来るまで、旧学生会館(現・至誠館の位置)の一階で、磯田義治さんがうどんな屋をしていましたわな。私なども利用しました。あの磯田さんに出てもらって。

駒井 田畑学長のときですわ。それから学生健康保険組合も、僕が言い出してね。定期健康診断とか医療費の軽減ですよ、目的は。

——学生の代表は井上勲君？

駒井 そうでした、井上君が熱心に動いてくれました。

——あれはいい制度ですね(昭和三十年十月発足)、学生は全員加入、医療費の五十パーセント給付。学生健保がつくられたのは、全国で同志社が最初らしいですね。

駒井 最初です。それ以後にあちこちの大学でもつくようになりましたが。

——厚生課長から学生課長になられて(昭和三十一年九月)、そのころからですか、学生厚生補導理論の啓蒙を始めるのは。

駒井 S・P・S、スチューデント・パインネル・サーピスと言いましてね、アメリカから入ってきたんですわ。学生の課外教育、生活援助をどのように考え、どう実施するかという理論と実践ですな、それが入ったころでした。それを私立大学連盟の厚生補導部会などで勉強しましてね、僕が厚生課長のころからですわ。

——懐かしいですねえ、S・P・S！私には駒井先生が総務部長になられてのち、昭和四十年ころから学生部の仕事に着いたんですが、その頃でもS・P・Sを勉強せにやいかんとね、山本文雄さん(当時学生課長)、河合璋さん(当時厚生課長)などに言われて、いろいろ教わりました。生活援助もそうですけ



上野直蔵先生

れども、課外教育の理論とか指導といったことは、旧制大学にはなかったんでしょ

駒井 なかったです。教室での授業だけ。

——クラブ活動、サークル活動の類は戦前にもあったようですが、理論にもとづいて指導・援助するというのは、S・P・S理論が入ってからだと考えていいですか。

駒井 そうです。戦前の学生主事の事は補導だけやからね。

——学生運動も盛んだったんじゃないですか。

駒井 盛んだったというても、六十年安保以降のようなことはなかったですよ。それま

での活動家にも過激なのがいるにはいたけれども、あまり政治的ではなかった。生協をつくるとか学生健保をつくるとか、自治会を組織的にきちんとやるとか、建設的だね。のちにニュー・レフトの方向へ移っていくわけですが、僕が学生課長のころからそういう傾向がありましたよ、だから僕はよそへ行っても

ね、「うちの学生は全学連に入っているけれども、ちよつと違うんだ」というていました。

——同志社の伝統である自由主義、自治主義が生きているわけでしょうか。

駒井 それは大いにあると思う。

——同志社は新島の時代からそうですが、学生が授業のやり方や学問のことで、議論をぶつけて教師を困らせる、新島もずいぶんやられていますけれども。そういう学生は駒井先生が学生課長のころにもいたでしょう、政治などによって縛られることがなくて。

駒井 それはいました。その一部がいま精華大学で理事とか部長とかやっている（笑）。

僕は脚が弱ったのでかんべんしてくれといっているんですが、彼らが経営の相談にのってくれとかいろいろもんやから、月に一回、いまでも精華へ行っています。

——学生課長のころの縁ですなァ。

駒井 そういうことでねえ。（笑）

——学生課長というのは学生にとつて大学当局の象徴のような存在ですわね、そういう人と学生活動家が、人間同士として生涯かわらない信頼関係をもつようになる。なにがそうさせるんでしょうか。

駒井 僕は学生と議論するのに逃げずに、積極的にやつたですよ、徹底してやるんですわ（笑）。議論するのに大学論が必要になる、それで大学論を勉強しましたね。

——それで大学論を……。しかし、S・P・Sにも大学論は必要でしょう、大学とは何か、大学教育とは何か、それを抜きにしてはS・P・S理論は出てきそうにないから。S・P・Sを手掛けられたとき、大学の理論的な研究も始めておられた、そういう気がしますねえ。
駒井 それは確かにそうですね、ただ意識的にね、学生と議論をせんならんもんやから、それで。（笑）

総務部長のころ

——先生が大学の総務部長になられるの

は、たしか昭和三十七年六月、上野直蔵学長の時代ですね。

駒井 そうでした。

——それまでに上野先生とは親しくなさっておられたんですか。

駒井 いや、上野先生のこととはほとんど知らなかった。もちろんつきあいといつてなにもなかった。僕を上野先生に紹介したのは、私大連盟の石田事務局長ですわ、上野先生は連盟の常任理事をして。僕は石田君と厚生補導の研修会などを通じて親しくしていたし、よく議論もやっていたからね。それで石田君が上野先生に「駒井さんに総務部長になつてもらったらどうですか」とね。

——なるほど、そういうことで。

駒井 上野先生が「君、総務部長やつてくれんか」と言われるで、僕は条件を出しましてね、「財政的な問題は全部まかせてくれますか」、とね。なんでもかんでも直接学長に言うていかれたのでは、財政面にも影響を生じることになるし、上野学長は私大連盟の用務などでしょうちゅう東京へ行ったりで留守だから、業務がとどこおるといふ問題もあつたわけですよ。

——それまではすべて学長に集中していたんですか。

駒井 そうです。

——教職員組合との交渉なども？

駒井 そうでした。だから「財政的な問題についてはこちらへまわして下さい、交渉の結果については決裁をしていただきますから」というたわけですよ。そしたら「ぜひ、そういうことでやつて下さい」ということで、「それじゃやらせてもらいます」ということになったのです。

——そのほうが学長も助かりますわね。それで、総務部長になられてからは大学論のほかにどうなさつたんですか

駒井 いや、やりました。総務部長になつてからも厚生補導部会のアドバイザーとか講演によく引つ張り出されたり、管理運営のほうでも、大学論をもたない管理運営ではない、大学論からやり直す必要があると言ひましてね、大学の歴史とかいろいろ本を読んだりしてお互いに勉強しました。近代的な経営手法はそこから導き出すべきだということ。大学の本質に立脚した管理運営をね。

——大学の管理運営には大学論が必要だと

いふのは、大いに賛成です。大学論をふまえた立案であり行政でないと、変な政治主義や技術主義に陥りかねませんから。

駒井 そういうことで、私は勉強しようじやないかと……。学生部の仕事をしていたときなどは、部会をもつて、女子職員にも勉強して報告してもらいました。彼女たちは図書館へ行つて調べたりね、よくやりましたよ。

——先生は大学紛争時代にも総務部長をなさつていて、学長は次々にかわるし、本当に大変だつただろうと思いますけど。同志社に限らず、紛争以後、S・P・Sもそうだけれども、大学論が低調になつたように思いますねえ。管理職自体に大学論がなくなつて。

駒井 そういうことはいえるでしょう。

——先生はその後もずっと一貫して大学論に取り組まれて……。

駒井 紛争のあと山本（浩三）学長から、宗教部長をやるようにといわれて、宗教部へ移りましたね（昭和四十五年五月）、宗教部はご承知のように総務部とちがつて、比較的時間が自由に使えるんですわ、来客もあまりありませんからね。

——激務から解放されたわけですね。ちよ

つと意外な人事という気がしましたけれど、まア、神学専攻のご出身だから。(笑)

駒井 僕にも意外でした。けど、時間があ
るから、一つ大学論をこの機会にまよめてお
こうという気になりましたね。

——それまではねえ、紛争やなんかや
で……。でも論文は書いておられたでしょう、
何篇か拝見したことがあります。

駒井 その総まとめですわ。

大学論の仕上げ

駒井 その頃、京都大学に相良惟一という
教育行政学の教授がおられて、いまは聖心女
子大学の学長を経て顧問をしていますけれど
も、その相良教授の著書や論文をかなり読み
ましてね、そのうち親しくなったもんやから
研究室へ訪ねて行っていろいろ教えてもらっ
たり、研究室の図書を利用してもらったり
しまして。

——それで研究が進んだわけですね。

駒井 まア、そういうことです。宗教部長
の業務のかたわら勉強させてもらいました
ね。そんなふうにして原稿に纏めたのがこれ

です。

——ナマ原稿じゃありませんか。表題は？

駒井 『大学と社会』です。

——ずいぶんの量ですが、四〇〇字詰で。

駒井 約六〇〇枚です。

——もつたないですわねえ、原稿のままに
しておかれるのが……。出版する方法がない
かしら。

駒井 こういう固いものは、出版社が歓迎
しないからね。

——出版社でなくても……。駒井先生のラ
イフ・ワークでもあることだし。まア、その
ことは別に考えるとしてまして、これをお纏め
になられて、大学というものを端的にいうと
しますと……。

駒井 歴史的にみますとね、大学はその時
代、時代によって考え方や運営のやり方が違
っているのです、時代によって変わる部分があ
ります。

——時代の影響を受けるというか、反映す
るといふか学問自体がそうですわね。

駒井 しかし、それでもなおかつ、ずっと
一貫して変らないものがあるのです、ケルン
のようなものですなア。もし時代、時代によ

って変り、時代に流されていくのだったら、
大学はもうお終いですわ。変らないケルンと
いうか本質的なものがあるからこそ、大学は
時代を超えて永続するし、社会とか学問とか
さまざまな分野に対して貢献できるのです。

——コンピュータ学院とかデザイン学校、
つまり技術本位の専修学校とはそこがちがう
わけですね。

駒井 まさにそうしてね、技術を教える
ことが中心の専修学校だったら、時代が変る
と淘汰されますわな、そうでしょう。

——はい。

駒井 そこが大学と専修学校の違うところ
で。だから、大学の本质というか根本とい
うか、そういったものをつねに見据え、発見し、
大切に育てていく、それが大事なんです。大
学の理念ですなア。

——時代によって変わる部分があっても、そ
ういったものをきちんと見据えておれば、軌
道修正ができますからね。

駒井 そうそう、行き過ぎたり誤ったとこ
ろがあれば、大学の変わらない理念にもとづ
いて反省して、つまり元に返って、そこから出
直すということが出来る、また、それを常に

やらんことにはいかんのです。

——ヤスパースの大学の理念を読み直すと、建学の精神を再確認するとか。

駒井 そうそう、僕などもヤスパースあたりから勉強を始めました。

——同志社の大学の理念となると、そういった古典や一般的な大学論だけじゃなくて、新島襄の同志社設立の精神というか、教育に対する考え方を見失うと具合がわるいでしょうね。私学にはそれぞれ独自性がなければいけないという点におきましても。

駒井 それはやっぱりそうであってほしいと思います。

——私は五年ほど前だったか、アメリカへ参りましたとき、カルフォルニア大学の学長だったクラーク・カー先生の講演を聞いたことがあるんです。カー先生に限りませんが、欧米の大学は学長が素晴らしい大学論を書きま

すねえ。

駒井 学長になるような人は、学長つまり大学のヘッドとしての教育を受けているんじゃないかという人で、みんなでそういう人を育てよう。そして、みんなで協力しあうし、一度学長になると、かなり長期にわたってその職

務についていますね。当然それなりの大学の理念とか大学行政論をもっていて、いい本を書いているんです。その点、日本はちよっとお粗末というか、そういう大学のヘッドが育たん、また育てようとしないうわけてね。

——先ほどお話があった理念に即して現状を改めていくというのは、まずヘッドがやらなくちゃいかんでしょう。日本でいえば総長・学長・理事、それからいわゆる管理職にある人たちですね。在職当時、駒井先生がなさっていたようなことを。

駒井 そやから、僕は私大連盟の管理運営の研修会でもよくいうたわけです、「大学論をやりなさい、大学論をもたない管理運営では駄目やから」とね。

——全くそのとおりだと思いますね、ことに大学紛争以後の大学の管理運営をみておきますと。どうも政治的、技術的になり過ぎて、いるように思えてならんです。同志社が特にそうだと思うのはありませんけれども。

駒井 大学紛争でどこも大なり小なりゆがんだからね。

——その後遺症が十分に回復しきっていなかったところへもつてきて、今度は進学人口

の増加そして激減でしょう。社会的・政治的にはソ連や東欧諸国の大変革があつて。

駒井 社会がどんどん変つていきますな、変革期ですな、大きな。

——だからなおさらしつかりした大学論がなければ、大学はどこへ向つて流されるやらわからんという……。

駒井 多少ともそういう恐れがあるから。

——いま、もし読むようにお勧めになられる本があるとしたら。

駒井 アーノルド・トインビーの『一歴史学者が見た宗教』です。宗教哲学的な本ですがね。僕は以前にはトインビーの著作を読んでもそれほど感銘を受けなかったですが、現在ではとても感銘を受けています。人間はこういう哲学をもたなければ腰が定まらないんだとね、そのことに気がつきました。

同志社への希望

——最後になりましたけれども、先生は同志社の理事、評議員などもなさっておられたし、同志社外の大学の経営や教育にも当たられたので、いろいろ問題を感じておられると

思うのですが、同志社の現状と将来について、なにかお聞かせいただけると有難いのです。

駒井 国際主義ですな。そういう言い方はしなかつたけれども、同志社は新島先生以来、国際主義でしょう。

——そうですね、伝統がございます。

駒井 そういう伝統があるわけやから、同志社が全国の大学の先頭をきつてそれをやるんことにはいかんです。本当の国際主義を身につけて、外国人学生や研究者の受け入れも大事だし、国際的に活躍できる人間をもつと育ててもらいたいですな。それには国際主義についての思想と同時に、外国語ですな、外国語をしつかり身につける、そういう教育にもっと力を入れていただきたいですな。

——どうも長時間、有益なお話をありがとうございました。

二九〇年七月二十四日、駒井元大元総務部長宅で収録

『同志社百年史』について

『通史編』(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹の権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分も隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

『資料編』(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

『通史編』一、六五八ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円送料五二〇〇円

『資料編』一、二九二ページ。

頒価・二〇〇〇円送料八三〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(☎〇七五一一五一三〇三八)